

報告:

【国際シンポジウム「新時代の教育・学習支援環境を考える」】

平成26年3月17日、伊都キャンパス稲盛財団記念館にて、基幹教育院主催の国際シンポジウムを開催しました。基幹教育院緒方広明教授のオーガナイズのもと、海外から4名の講演者をお招きして、MOOCs等のオープン教育、ユビキタス・シームレス学習、学習ログ分析(Learning Analytics)等についてご講演頂き、新時代の基幹となる教育・学習環境のデザインについて議論しました。

詳細は、<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/topics/view/109> をご覧ください。



シンポジウム会場の風景

留学生によるモバイル学習の事例

案内:

【九州地区大学一般教育研究協議会】

九州地区大学一般教育研究協議会が九州大学伊都キャンパス、センター2号館で9月5日(金)、6日(土)の両日に開催されます。「学生の多様化に対応したアクティブ・ラーニングと学習支援」を統一テーマとし、山内祐平先生(東京大学)と西村優紀美先生(富山大学)による基調講演と統一テーマに関する事例報告並びに一般研究発表が展開されます。参加費は無料です。詳細は基幹教育院ウェブサイト(<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/>)を参照下さい。

【国際会議ICCE(International Conference on Computers in Education)第22回】

ICCEは、1989年の第1回目から毎年開催されている歴史ある国際会議として知られ、2014年11月30日～12月4日には奈良で第22回目を迎えます。コンピュータ技術の教育利用をメインテーマに、現在は7つのサブコンファレンスから構成されており、新しい情報通信技術を用いた教育システムの開発から、教育現場での実践や理論に至るまで幅広いトピックを網羅し、この分野の国際会議として中心的な役割を担っています。基幹教育院緒方広明教授がプログラム委員長・実行委員として運営に携わっています。詳細は<http://icce2014.jaist.ac.jp/icce2014/>をご覧ください。

◆編集後記

椎木講堂にあふれんばかりの新入生を迎えてから早くも数か月がたち、雨後の雲間からさす陽に夏の兆しを感じる頃となりました。基幹教育院という新しい学び舎のスタートに教員もまた独特の緊張感で過ごした期間でありました。伊都では夕刻になると、リフレクトシートの茶封筒を抱えた教員が小走りにセンターゾーンを歩き交う姿が見られます。「セミナーですか?」を合い言葉に茶封筒教員は時に足を止め、授業での感想や経験を語り合います。その成功例と失敗談に、胸をなでおろしたり驚いたりしながら気がついたのは、教員ひとりひとりにそれぞれが目指す基幹教育の形があることです。このニューズレターが、そのような等身大の基幹教育院の声を学内に広く伝え、問題を共有し、読んだ方の心に耳を傾ける、そんな対話の一手段になれば幸いです。今後も、特集記事に加え、基幹教育院セミナーと課題協学科目の授業紹介、教員紹介のコラム、基幹教育院に関わる学会・シンポジウムの報告／案内を載せていく予定です。

最後に、突然のお願いに快く寄稿して下さった先生方に編集委員一同深く感謝申し上げます。

©2014年7月25日発行

©編集委員: 新谷泰明、青野純子、岡本剛、森田邦久 ©事務担当: 学務部基幹教育課



九州大学基幹教育院
Faculty of Arts and Science, Kyushu University

きん

基幹教育院ニューズレター

特集

キックオフ・シンポジウム

教員紹介

授業紹介(基幹教育セミナー・課題協学科目)
学会・シンポジウムの報告／案内

発行 九州大学基幹教育院 〒819-0395 福岡市西区元岡 744
Phone: 092-802-6009 URL: <http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/>

Summer
2014

表紙デザイン/岡本剛

5月24日(土)に基幹教育キックオフ・シンポジウムが盛大に挙行されました

去る5月24日(土)、基幹教育キックオフ・シンポジウムが椎木講堂にて開催されました。「基幹教育」は、二年半の検討準備期間を経て今年度からいよいよ始動した、「アクティブ・ラーナー」の育成を目指す先進的かつ意欲的な大学低年次教育です。本シンポジウムは「大学における学びのあり方を問い直す」というテーマを掲げており、基幹教育が目指す新しい大学教育のあり方を広く社会に発信することが目的です。当日は、学内外から学生も含め350名の参加者が集まり、盛況となりました。

冒頭、有川節夫九州大学総長の挨拶に続いて、文部科学省高等教育局長吉田大輔氏から基幹教育に対する期待が述べられました。そして基幹教育院長である丸野俊一九州大学理事・副学長が本シンポジウムの趣旨説明をし、基幹教育の理念が周知されました。基調講演には鈴木典比古国際教養大学学長と宮川繁マサチューセッツ工科大学教授をお迎えしました。

お二方からは、その長年にわたる先進的な高等教育研究および実践のご経験から貴重な提言を頂きました。

基調講演Ⅰ 鈴木 典比古 国際教養大学学長

「大学における教え方を問い直す —20世紀型から21世紀型へ—」 ～人工植林型教育から雑木林型教育への転換

まず、鈴木学長には「大学における教え方を問い直す—20世紀型から21世紀型へ—」と題して社会が大きく動くことにあわせ大学教育は変化する必要性があり今まさに世界的な節目を迎えていることを指摘し、人工植林型教育から雑木林型教育への転換という提言を頂きました。人工植林型教育とは、「大量の同質的な人材を社会に送り出す」ということをもって第一の目的とする教育で、大学側が一方向的に学生へ知識を与えるタイプの教育です。しかし、21世紀に入り、社会は多様でグローバルな人材を求めています。それゆえ、21世紀型の教育は多様な人材がみずから育てていく「雑木林型教育」でなければなりません。このような雑木林型教育においては、従来型の専門学部教育から学士課程教育へ移行する必要があります。つまり、学生が将来的にどのような分野に進んでも主体的に学びかつ行動ができるための基幹となる能力・技能を身につけさせる横断型の教育への移行です。そしてそのためにはプログラムが順次性、体系性をもって構成されていなくてはならず、また各科目における到達基準の明確化も不可欠となり、シラバスが重要な役割を持つこととなります。さらに、各科目の到達基準の明確化は、学生の(海外も含めた)他大学への移動を容易にしますが、このような学生の流動化は優れたグローバル人材育成には不可欠です。最後に、鈴木学長は近年多くの大学で利用されているルーブリック(学習到達状況評価基準表)もまた非常に重要な手立てであることを指摘されて、講演を終えられました。

「教育のオープン化 —いったい何が起ころのだろう—」 ～MITにおけるOCW/MOOCの取り組みで見えてきたもの

つづいて、宮川教授は「教育のオープン化—いったい何が起ころのだろう—」と題して、教育を再考する「Future of MIT Education」における検討状況と「基幹教育」との類似性に言及し、他の学生たちと大きな事を成す学生がもつチームワークの能力に触れ、優れた教材を優れた教育へ繋げてきたOCW（オープンコースウェア）がMOOC（大規模オープンオンライン講座）へと新展開する様相を紹介されました。MITでは、いつでもどこでも無料でMITの教員が作った教材を自由に使えるシステムであるOCWを構想し、現在ではMITのほぼ全ての科目、教材がOCWにあがっています。このOCWはアクティブ・ラーナー育成にも役立てることができます。なぜなら、OCWにあがっている教材を自由にダウンロードして自分なりに、たとえば「ペリール航の歴史」などといったものを作ることができます。このOCWが発展して最近ではMOOCというものも出てきました。これは1つのコースになっていて、修了すると証明書がもらえます。このMOOCによりMITはそのミッションを果たすことができます。すなわち、「新しい知識を生み出し、広め、保存することに全力を注ぎ、他の人々と協力してこの知識を世界の大きな問題に当てはめる」というミッションです。またMOOCで開発された評価法を取り入れることによって成績が最低20～30パーセント良くなるという現象が起きています。以上のように、大学のミッションを果たすためにもオープンエデュケーションは重要な役割を果たすということを宮川教授はご指摘されて講演を終えられました。

パネルディスカッションは大いに盛り上がり、会場からも多くの質問が寄せられ、 盛況のうちにシンポジウムは幕を閉じました

鈴木学長と宮川教授の基調講演の後、九州大学基幹教育院副院長の谷口説男教授が基幹教育カリキュラムの概略を「基幹教育とは～アクティブ・ラーナーの育成を目指して～」という観点で説明し、これを踏まえて、「次世代育成を担う基幹教育への期待と展望」と題したパネルディスカッションを新谷恭明基幹教育院教授の司会で行いました。まずは学部教育と基幹教育との関連について、高山倫明九州大学文学部教授と園田佳巨九州大学工学部教授から報告があり、吉見俊哉東京大学副学長と山田礼子同志社大学学習支援・教育開発センター長からは基幹教育に対するコメント、質問がなされ、谷口副教育院長が答えるという形ですすみました。会場からも多くの質問が寄せられ、基幹教育に対する関心の高さを知らされました。

最後に九州大学基幹教育院院長代理の若山正人教授が挨拶し、盛況のうちに終了しました。基幹教育院のメンバーは、このシンポジウムを機に基幹教育の理念を改めてかみしめ、より充実した大学教育を構築していく決意を新たにしました。

安田 章人（やすだ あきと） 基幹教育院教育実践部助教

みなさんは、「アフリカ」と聞くと、なにを思い描くでしょうか。地平線を埋め尽くすサバンナ、アカシアの葉を食むキリン、草むらに身を潜めるライオン。おそらく、雄大なサバンナに生息する野生動物の姿を真っ先に想像されたと思います。あるいは、ヘミングウェイが好きな方であれば、東アフリカにおける狩猟旅行を題材とした「キリマンジャロの雪」を思い出されたかもしれません。



カメルーンの調査地で、村人とともに

では、「アフリカでは野生動物を「護る」ためには、それを娯楽のために「殺す」狩猟旅行、いわゆるスポーツハンティングが有効であると評価されている」と聞くと、多くの人が疑念を抱くでしょう。つまり、「殺すことが護ることにつながるのか」と。

なぜ、そのような論理が成り立つのかということ、ひとつの考え方として、狩猟規則や捕獲枠で管理され、多額の収益や雇用を生み出すスポーツハンティングは、「経済的な豊かさ」と生態的な持続可能性を保障するため、野生動物保全に有効なツールであると評価されているためです。

しかし、「持続可能性」とは、経済的あるいは生態学的な観点のみによって評価できるのでしょうか。また、スポーツハンティングが地域社会にもたらす影響とは、肯定的なものだけでしょうか。わたしは、2004年からアフリカ中央部・カメルーン共和国北部でフィールドワークをおこない、スポーツハンティングと地域社会の関係を題材に、「持続可能性」について、環境社会学の観点から研究をおこなってきました。

カメルーンにおけるフィールドワークをもとにした研究のほかに、「生き物の命を奪うこと」に関する研究を進めています。スポーツハンティングに対し、多くの方は「なんて残酷な行為か」、あるいは「食べないなら殺すべきではない」と思われたでしょう。では、なぜ食べるためならよいのでしょうか。その動物にとっては、殺されることには違いはないのに。これに関しては、実は私自身も国内でハンターとなり、実践的研究をおこなっているところです。

「持続可能性とは、なにか」、「人にとって動物の命を奪うことは、なにを意味するのか」について実証的に考えると、現代社会が抱える課題や、人間という存在の不思議が浮かび上がってきます。そして、多元性に満ちたそれらの問いを正確に捉えるためには、創造的かつ批判的に吟味する幅広い視野が必要であることが見えてきます。

こうした問いと、研究成果を学生たちに語りかけながら、基幹教育院の使命であるアクティブ・ラーナーの育成に尽力したいと考えています。よろしくお申し上げます。

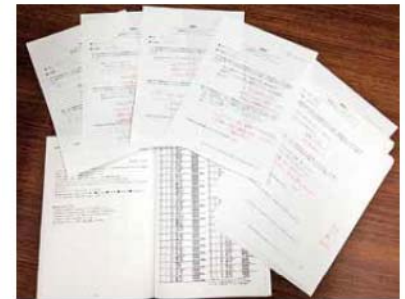
基幹教育セミナー

基幹教育セミナー科目実施班から

野瀬 健（基幹教育院教授）

本年4月より、新しい科目として基幹教育セミナー（以下セミナーと略）が開始されました。

セミナーは必修科目で、九州大学に入学した1年生全員が履修しており、様々な学部学科の学生が22名～23名のクラスに混在したかたちで授業を受けています。実施班では、これら全体で120クラスの運営を担当しております。ところで、セミナーを始める前は全ての新入生を対象とする科目であることから、学生はやる気をもって授業に参加してくれるのだろうか？という心配をしていました。しかしながら、思った以上に学生の反応は良く、機会のある度に丁寧にセミナーの意義を説明することで、新入生の多くが興味をもって授業に臨んでくれるように感じています。ところで、セミナーでは「対話と自己省察を通じて学びの基幹を育むこと」を目的としています。実は、これは学生向けの目標なのですが、この目的を達成する（してもらう）ためには、担当教員にも対話のスキルや自己省察が必要になるようです。すなわち、授業において教員と学生、そして学生同士の対話をスムーズに行う（ってもらう）ためのファシリテーション、学生に向かって語る前の自己省察が必要になるということです。さらに、教員自らが相手の話をよく聞き（傾聴し）、適切な語句を使って相手に伝わりやすい話し方をするに気を遣いつつ、学生同士の会話がきちんと成立しているかどうかにかまきり、など集中力・緊張感も求められています。学生に向かって話す「私にとっての学び」の準備では、「あの時（時代）どんなことを考えていたのかな」「どうしてあんな判断をしたのかな」などと、自分と語り合う時間も必要だと気がつきました。こんな訳で、最近、セミナーを担当することで教員（私）自身が鍛えられているような気がしてきました。ともあれ、まだまだセミナーは半分を過ぎたところで、これから先どんな展開が待っているのか？正直ドキドキしています。このニューズレターが皆さんに届く頃には結果が分かっているのでしょうかね。それでは、最後になりますが、セミナーを担当して頂いている皆様のご協力に深く御礼申し上げます。



課題協学科目

課題協学科目実施班から

古屋 謙治（基幹教育院教授）

基幹教育がスタートして早や2か月が経過しました。学生・教員ともに文理混成チームで臨む課題協学科目においては実施前に様々な不安がありました。各教員チーム内での綿密な打ち合わせや科目班メンバーの献身的な努力が実り、授業は順調に進んでいます。この場をお借りして科目班班長として改めてお礼申し上げます。

個人的に実施した本授業に関する学生アンケートでは、ほとんどの学生が他学部・他学科の学生と議論し協働作業を行う機会を好ましく思っていると回答しています。これは昨年度実施した試行授業でも同様の結果でした。しかしながら、希望者のみが受講した試行授業にとどまらず必修科目として実施した今年度においても同様の結果が得られたことは注目に値します。詳細は前期授業終了時の授業アンケートで明らかになることですが、本授業が学生たちに良い刺激を与えていることは間違いないさそうです。そうは言っても、本授業は学生に興味の種を撒き視野を広げるためのきっかけを与えているに過ぎません。学生の心に芽生えた興味をディシプリン科目や高年次基幹教育科目などを通して成長させることも基幹教育の重要な役割の一つです。本授業は全学出動体制に基づき全部局の先生方にご担当いただいています。この先生方が文理混成で3人チームを組み一つの授業を作り上げていく作業は「課題協学」の授業そのものであり、先生方ご自身もまたこの科目の受講生です。本科目を担当することで先生方ご自身の視野が広がり、今後の授業のみならず大学運営等にも良い影響を及ぼしていただけることを期待しています。より多くの先生方がこの科目を体験してくださいことを願っています。

